

川西を愛する隊員、市役所前広場に集結



迫真の演技で迫る、プロモーションビデオ 8月1日公開!



走り出したプロジェクトチーム 特集 僕らが集まるわけ

今、市では市制施行60周年を、まちの魅力を市内外に発信する機会と捉え、さまざまなシティプロモーションを展開しています。その中で、参画と協働による取り組みの一つとして昨年11月に発足した「かわにし魅力発信プロジェクトチーム(PT)」。

集まったメンバーは市民や事業者、市民団体などで、まず自由にアイデアを出し合い、グループに分かれて川西を盛り上げようと企画、実行しています。メンバーたちが感じる川西の魅力とは。PTから生まれた4つのチーム「かわにし宣隊レンジャーズ&ジャッカー軍」「かわにしホームパーティー」「60周年記念ソング」「懐かしの映像「かわにしの今昔」にみんなで乾杯!」を追い、彼らの熱い思いに迫ります。

問い合わせ/魅力創造課 ☎ (740) 1121



監督 石見 沙織 (市職員)

幅広い世代の注目を集める

「60周年に川西を盛り上げるきっかけとして、魅力発信プロジェクトで案を出し合った時、私の頭に浮かんだのは戦隊モノでした」と話すのは監督の石見さん。

「今のままでは、いっぱいある川西のいいところが伝わっていない。幅広い世代の人に注目してもらえて、伝えられるのはこれしかないと思いました」

制作は何もかもが手作りです。「まず初めに、市のホームページでメンバーを募りました。戦隊モノをやるのならと集まったのは、元円谷プロダクション所属でウルトラマンのショーをしていた人や、市内で活動する劇団の人のほか、年齢や職業がさまざまな人たち。それぞれの経験を生かし、道具や衣装、演技など、材料も持ち寄って、すべて手作



副リーダー 黒山 敦也さん (郵便局長)

りしました。次に、どうやって宣伝しようか、市内のイベントに行くだけでは、なかなか広まらないのではないかと、そんな話し合いの中で、動画を作って、インターネットでもPRしようということになりました。

まだまだ、生まれたばかりのヒーローです。これからどんどん成長していきますが、初めからずっと貫いていることが一つあります。誰もが引き継いでいけるようにすることです。活動を人から人へつなげていきたい。マスクがあれば誰もがレッドになれる。今後、女性のレッドが登場するかも知れませんよ」

みんなの手で作りたいシンボルのヒーロー

「参加したきっかけは、市内に勤めているからです。参加してみてもいいから市役所の人たちが市のPR活動をしていると感じまし



得意分野を生かした演技指導

た」と自身が体を張って、宣隊のPRをしているのは、チームの発足当初から積極的に関わっている副リーダーの黒山さん。

「こういうことを、もっとたくさん市民に知ってほしいですね。ホームページで伝えるだけではなく、これからどんどん市民が参加してくれるようになればと、そのための仕掛けを考えています。というのも、私は久代で勤めています。市内は南部以外あまり知りませんが、そういう人、多いと思います。この活動が、もっと広域の情報を知らせる一つのきっかけにならないか、思案しているところです。地域のイベント会場などで他のイベントを紹介したり、川西の良さを伝えるレッドが、シンボリックな存在になって、人と地域をつなぎ、人の流れを作る。そんなヒーローをみんなの手で作りたいですね」



The project team
かわにし宣隊レンジャーズ & ジャッカー軍

「レンジャーズ誕生ストーリー」市制施行60周年を迎え、盛り上げりを見せている川西市。そんな中、シティーセールス部門の魅力創造課窓口で覆面の男たちが、「かわにしは地味で静かなところがいいって言ってるやないか」。今のかわにしが好きで、現状を維持したいジャッカー軍。PRを続ける姿勢にいら立ちを見せ、揚げ句の果てに職員を誘拐しようとする。

一方、騒ぎの野次馬だったカレ屋の青年、川西野紅介は何者かにマスクを被せられる。出陣せで自分が、かわにし宣隊レンジャーズと名乗ってしまった上、荷物を倒しジャッカーたちをやっつけることに。こうして偶然ヒーロー「レッド」が生まれたのだ。



歌詞の素材は見慣れた景色の中に

The project team 60周年記念ソング



川西のイメージを出し合うワークショップ



塩見 友袈さん (大学生)

**人と人が
歌でつながっていく地域に**

「中学生の時に金太郎ミュージカルに参加したのがきっかけで、それまで知らなかった川西のこと、例えば源氏ゆかりの地であることなどを知り、出演者の人たちと市内で地域のことを聞いて、どんどん川西のことが好きになりました」と話すのは、6年前、1回目の市民創作ミュージカル「川西の金太郎」に出演した塩見さん。

「私自身がミュージカルを通じてたくさんの人と知り合えたので、私も歌で何か皆さんのお役に立つことができたらと思います、このチームに参加しました。」

歌詞の内容を説明しながら「学校やバイトが忙しくて遅く帰ったとき、ふと見上げた夜空にたくさん星を見つけると、ああ、いいなあと思っています。他にもたくさんいいところがありますが、気付いていないのはもったいないです。私も歌を作っていたから、改めて感じる事ができたので、この歌をきっかけにして、皆さんに気付いてもらえたら嬉しいですね」と身近な景色や音を感じ取り、詞に変えています。

音楽を人が集まるきっかけに

「音楽が好きで、川西で音楽プロジェクトをしている人と知り合っただけから、もっとまちの中に音楽があればいいのと思っていました。市内にみつかなかホールはありませんが、若い人たちが活動する場所は少ないようです。もっと音楽に触れる機会が増えればいいですね」と北澤さん。

「市内で開催された『かわにし音灯り』で川西出身のミュージシャンがたくさんいるのを知り、こういうイベントをもっと増やすために、小学生から高齢者まで浸透するような歌があれば、川西を音楽のまちと認識してもらえないかと思っています。音楽好きの人が集まるきっかけになってほしい。それをめざして、ジャズや民謡など違うジャンルの人たちがアレンジで共有できる歌を作りたいです」



北澤 嘉浩さん (大学教授)



ラグ・ピクニック in 知明湖キャンプ場

The project team かわにしホームパーティー



里山を満喫した後はおいしいお弁当♪

川西を「知る」だけでなく「思い出し」に残る経験を

物々交換によって人と人とがつながる橋渡しなどの活動を市内で行う「だいわん」代表の三木優子さんは、ホームパーティーのチームを作った理由を「川西って家が集まったところのイメージがあったので、ホームを祝うパーティーっていい感じ、面白そうだから、やってみよう!」ってことになったんです」と話します。

「川西の北部にある里山は、自然に恵まれていて気持ちいいですね。企画してから2回下見に来ましたが、この地区の人がいろいろと教えてくださって、ますますここが好きになりました。おかげで、ピクニックのコースにちなんだクイズができて、今日も楽しんでいただけました。ラグは、県立人と自然の博物館の人にお話を聞きに行ったときに、貸し



してもらえなかったんです。昼間、川西にいない人にも、楽しく参加しながら川西のことを知ってもらえたらと思っています。きつと、今よりもっと川西が好きになりますよ」

部外者だけど、だからこそ分かることがある

三木さんと同じ「だいわん」のメンバーで、このチームのリーダー横瀬加倫さんは「はじめは、正直、地域のことあまり興味なかったんです。でも、留学しているとき、優秀な学生が自国ではなく海外でばかり暮らそうとしているのを見て、もったいないと思いました」と振り返ります。

「経験や技術を自分の生まれ育った場所で生かしたらいいのに。そう思うと、急に身近な地域のことに関心が出てきました。こういう活動を始めてから、いろんな人に出会えるのが面白いと感じています。伝えていかなきゃもったいないことが、たくさん見えてきたんです。私は神戸に住んでいるので、部外者だけれど、だからこそ分かるがあると思います。今回の企画のリーダーをしています。が、今後もどんどん参加者を増やしていきたいですね。次は、市内で活動されている他の団体とコラボができればいいなと思っています」



PTには今までの経験を生かした心強いサポーターも



荻田 雅仁さん [商工会]

「街はカーニバル! プロジェクト」通称「街プロ」の立ち上げ当初から、中心的に活動してきたイベント企画の達人

4年前から街プロで秋の夜を音楽とキャンドルで彩るかわにし音灯りを開催していますが、今回の企画と意気は同じ。活動は常にオープンで新しいメンバーも大歓迎です。でも、イベントが定着してくると決まったメンバーがやっていると誤解も増しますので、どう広げていくか考えています。だからこそ、お互いが持っている企画をコラボさせ、たくさんの人に関わってもらおうチャンスにしたいと思います。かわにし音灯りは今後、参加したメンバーが各地域でノウハウを生かし、それぞれに合った形へ自由に变化させながらずっと引き継いでいける、そんなイベントに育ってほしいです。

東 茂泰さん [商工会]

川西の代表的なイベント「かわにし音灯り」や「東谷ズム」などでそれぞれの個性を効果的に広報しているPRの達人

今までの活動経験で役に立てることがあればと参加しました。でも、いざ企画が進んでくると、各チームがとても活発に動いていて、特にレンジャーズの皆さんが、ホームページでメンバーを募集したとき、20人くらいの方が集まったのには正直驚きましたね。行政も関わりながら進めているので、今までこういう活動をしたことがない人でも、参加しやすいのではないのでしょうか。いろんな立場の人が一緒に企画することで、お互いのいいところを出し合え、相乗効果が生まれると思います。もっと市民が主体的に物事を決めてやっていけるようになればいいですね。



森田 強さん [能勢電鉄(株)]

「沿線地域の発展に貢献していく」を合言葉に、チームのせでんが丸となって取り組むイベント連携の達人

昨年の開業100周年では「これまでの感謝」「魅力再発見」「魅力創造」をキーワードに、アートやグルメなど初めてのイベントを数多く開催しました。沿線地域や各学校、地域イベントで活躍中の皆さまと連携できたことが本当にありがたかったです。かわにし魅力発信プロジェクトチームでは、「地元愛」にあふれた方々が、立場を超え自由な発想で活動されています。皆さんが楽しみながら関わり合う、これが魅力発信への第一歩ではないでしょうか。これから地域をつなぐ鉄道として、沿線一帯と一緒に盛り上げていきたいですね。

中井 成郷さん [PTA 連合会]

PTA 連合会の会長として、学校や子どもたちが地域のイベントに積極的に関わるきっかけを作り出すパイプ役の達人

私たちの子どものころは、地域の行事に自ら積極的に参加していたように思います。でも、今の子どもたちは学校の勉強が中心になりすぎていないように感じます。そうではなくて、もっと地域の行事に参加し、おとなと一緒に作業をすることで子どもたちが感じるものがあると思います。特に音灯りへの参加は、自分たちでシェードを作った会場の一部を飾ることで達成感が得られ、参画意識が育ちます。こんな経験をもっとしてほしい。そして、またやりたいという気持ちを育てたいですね。



一人ひとりがシティプロモーションの担い手に

皆さんにとって、川西の魅力ってどのようなものですか。アクセスの良さ、自然に恵まれた住宅都市、清和源氏発祥の地、活発な市民活動など、市内外に誇れる魅力がたくさんあります。でも、その魅力がなかなか伝わっていないのも現実です。市では、昨年度から、シティプロモーションを進めています。これは、今ある魅力に新たな価値を加え、市内外の皆さんに知ってもらおうことで、まちへの誇りや愛着、関心を高める取り組みです。市制施行60周年をきっかけに、今回、ここで紹介させていただいた皆さんと一緒に、「訪れたい」「住みたい」「住み続けたい」と思ってもらえるよう、もっと本市の良さを広く伝えていきたいと考えています。そして、その担い手は、川西に愛着を持つすべての人たちです。皆さん一人ひとりの、さらなるご協力をお願いいたします。



魅力創造課 課長 岡本 敬子



チームリーダー 畑中 久代(市職員)

二岡 美樹子さん (親子 cafe オーナー)

座談会では懐かしい写真に当時の思い出話も

The project team

懐かしの映像 “かわにしの今昔” にみんなで乾杯!

懐かしい気持ちは「幸せ」を運ぶ
「懐かしさは、幸せを運んでくれる魔法かも」と話すのは、このチームのリーダー畑中さん。
「川西はベッドタウンとして知られています。毎朝早く出かけ、夜遅くに帰る。川西のまちの変化に目を向ける暇もなく、家には寝るために帰るような生活を送ってきた人が多いかもしれない。そんな人にも、川西のまちがどう発展してきたのかを感じてもらいたい」とふと思ったことが、この企画のきっかけだったそうです。
「今と昔の写真を使って、皆さんが楽しめる映像を2つ作ることにしました。一つは、昔の写真を見て語る座談会を開き、集めた古い写真や情報を基に、川西の今と昔のスライドショーを作ります。もう一つは、大きく変化を遂げた川西能勢口駅周辺に焦点を当て、座談会や街角での取材も取り入れながら、街並みは変わっても、人の心は変わらないと感じてもらえるようなストーリー映像にしたいです。どちらも、近所の居酒屋など、気軽な場所で見え語り合ってもらえたら、郷土愛を呼び覚まされ、幸せな気持ちになるのではないのでしょうか。いろんなところで『懐かしい』という言葉が聞かれ

ば、最高にうれしいですね」
川西を知るならこの映像
子連れでゆつくり過ごしたい人たちがいろいろ学べる場「親子 cafe」のオーナー二岡さんは「川西に引越してきた頃、仕事で中心で家には寝に帰るだけでした。子どもができてから、このまちのことを何も知らないと感じました」と言います。「私みたいな人は多いと思います。でも、子育て世代も、もっとまちづくりのことに関心を持たない。このチームに参加して、同じ立場の私がそういう世代の人とのパイプ役になれないか、どうすれば興味を持ってもらえるかを考えています」子どもたちを膝に乗せ、「私はこういう会に参加するとき、いつも子どもたちを連れてきています。これから先の社会を担う子どもたちにも、見てほしいからです。この子たちが大きくなったときに、このまちのことをちゃんと考えられるようになってほしいですね。多くの人は、市のことで知らないことがたくさんあると思います。だから、まずは、まちの移り変わりとかを興味深く見られて、長く使ってもらえるものを作りたいです。川西のことを知るなら、この映像だって言ってもいいかもしれません」と意欲的に参加しています。

